

「いやし、それは、ゆるし」

マルコによる福音書 9章 14節～32節

説 教 川俣 茂 牧師 (清教学園中学 宗教主事)

主イエスとペテロ・ヤコブ・ヨハネたちが山に登っている間、残っていた弟子たちのところに、息子をいやしてもらいたいと連れてきた父親がいました。結果として弟子たちは癒すことができませんでした。弟子たちは父親の願いを無視したわけではありません。できなかつただけでした。

22節の言葉は弟子たちの課題を浮き彫りにしています。「わたしどもをあわれんでお助けください」。弟子たちには「あわれむ」という姿勢が欠けていたこととなります。しかしそれだけではありません。弟子たちは神の力に信頼し、委ねられていなかった。つまり、この息子に対する真剣さに欠けていたとともに、弟子としての務めを果たせない状況になっていたこととなります。

山から下りてきた主はこの一連の出来事の中に「不信仰」を見ました。主がこの時代に取り組んだことは神への信頼を、信仰を回復することにあります。つまり主はこの「不信仰」な時代に「信仰者」として立っている。そこで何をしようとしていたのでしょうか。それは「信仰」を生み出そうと、見つけようとしていた。しかも忍耐をもって招き続けますが、それには「時」があります。それは31節にあるとおり、です。

19節の「いつまで、あなたがたに我慢できようか」という主の言葉は、つい私たちも口にしていない言葉ではないでしょうか。主がおられた時代はまだ信じやすかったと勘違いしてはいませんか。しかし主は既にこの時代のことを「我慢できようか」「不信仰」と呼んでいます。しかも誰に対しての言葉でしょうか。最も主に近かったはずの、最も主の言葉を聞いていたはずの主の弟子たちに対してでした。

私たちが我慢できない時、そこではすでに相手を排除していることが多いと思います。「愛」がないということになってしまいます。しかし、一見厳しい主の言葉では、実は「愛」が消えてはいません。愛しているからこそ、必死になって「耐えている」「忍耐している」主の姿が見えてくるのです。それは実は私たちに相対する父なる神の姿と重なっているといえます(ローマ人への手紙3章25～26節「神はこのキリストを

立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、それは、今の時に、神の義を示すためであった」)。

ところで、主が語る「信仰」「不信仰」とは何でしょうか。父親は息子を何とかしたいと思っていました。ある意味、息子と運命を共にしていたといえます。「しかしできますれば」という言葉の中に、何をしてもダメだったという、父親の悲しい経験が反映されています。

神に対して「できますれば」というのは、神に対する絶対的信頼の放棄です。それでも主は語ります。「信する者には、どんな事でもできる」。この言葉に対して父親は「信じます」と告白すると共に、「不信仰なわたしを、お助けください」と語りました。父親は自分の信仰と共に、自分の不信仰をも告白すると共に、誠実で、心からの告白をしているのです。

主はこの父親を、また弟子たちを「信する者」に、そして「何でもできる者」に変えたかったのでしょう。まず何よりも、主を信じるか否かが問われています。癒し損ねた弟子たちが語るべき言葉もまた「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」だったのでしょう。一見、違った立場に立っているように見えながら、共に主の前に立ち、主の言葉から信仰告白、懺悔、そして祈りへと導かれています。

主が十字架につけられる方として来て下さるからこそ、祝福に見合うものを何一つ持っていない私たちの告白を受け入れて下さる。決定的なのは信仰をご自身の働く機会として用いて下さる主イエス・キリストの力なのです。神の為されるところを絶対的な信頼をもって受け入れるのが「信仰」です。この絶対的信頼こそが最も困難なのかもしれません。しかしこの絶対的な信頼が回復された時、「不信仰の赦し」が起こる。と同時に「いやし」も起こるのです。これこそがキリストを信じる者に与えられる大きな恵みであり、喜びであり、慰めともなっているのです。

(記 川俣 茂)